



# ピクタインダカン

(おさみがりにぼし)

第 21 号

発行日 2019年5月25日

発行人 矢代 しず

秋田市御野塩7-1-29-305

## 部屋

久しぶりに

だれもない部屋へ帰る

パソコンは曇った貌で横たわり

読みかけの本は詩をいぶかっている

苦悶の記憶を

思い出させるトイレは

娘の手で綺麗に片づけられ

スリッパは整然と揃えられていた

観葉植物は光へ触手を伸ばし

母の日の造花の兎は

ピクンと立った耳をそばだてている

明るい緑色に染められたケヤキ並木の

見知らぬ風景の

若葉の隙間からは保育園の赤いバス

## 春

田打ちされた

土塊の隙間から

あらわれる

亡き父、母、兄の顔

光のなかに

煙草をくゆらす父と

腰をまげた母と

耕耘機を使う兄

彼岸の魂をよび起こしたのは

やさしい春の風

野辺に咲くスイセン

清らかなフキノトウ

春をのぞくウメの蕾

陽光は 大地に

きらびやかな

うす衣を織りだしている

あかるさが漂う

春の日のかがやきから

よろこびが湧きでてくる

春は

わたしの魂も

よみがえらせる

わたしは

母の鼻唄のように

春の耳元で口ずさむ

♪わたしは元気です！

あなたの空

忘れないでという声が

どこからか聞こえてくる

言葉が

そっくりそのまま表紙の色になったような

詩集

言葉の強い尖光が

魂を射った

わたしを覚醒させ

あなたの空につなぐ言葉

生きるために葉を落とす裸木のような

凜然とした生の言葉

平凡でもない

普遍でもない

言葉の肉体を

詩の空にさらす

あなた

四年前

あなたを一度だけ見たことがある

斜に構える人だった

個性のない

切れのない

わたしの詩の地平に

あなたは

喜びに満ちる

感受の光を

そっと射しこんだ

詩の夕暮れは

早い

光ある声なきものは

もたれるように白い地平に  
針のような影を落とし  
時をたたむ

言葉が生まれる詩の風景を  
聞きたかった

でも

あなたは亡くなっていた

わたしは忘れない  
あなたから生まれた言葉を

## 点滴

間切りされた部屋の一角  
点滴スタンドの  
輸液バッグをみつめる

点滴筒の薬液は

透明な管を

一滴 一滴

苦しさに耐える時間を刻するように

規則的に

少量ずつ

静脈内に注入されていく

無音

動いているのは

滴下する薬液のみ

一日 二日

回転軸がはずれる強い眩暈  
内臓がとび出す激しい嘔吐

三日 四日

点滴は

空蟬のような身に

いのちの水をみなぎらせはじめ

逆流する血の恐怖が

わずかに遠のいていく

四肢にはまだ強い痺れ

打ちのめされた時間が

翳を運んでくる

五日目

ゆらり ゆらり

とカーテンが舞う

ふくよかな光のナースが

窓外の満開の桜のような  
顔をのぞかせる



## 少年

ウー!!

静寂を破る

うねるような奇声

少年の声は止まらない

固く握った少年の

赤いボールが

歪む

介護する人は

少年の心奥の

靄が晴れるまで

何も言わずに

待っている

静止した時間が

細い線のように  
延びていく

凹んだボールが

元の丸いかたちになる

と介護する人は

ゆっくり

少年に話しかける

話された言葉に

平静を取り戻した

少年は

幼さいっぱいの顔で

介護する人の胸に

顔を埋めた

だれかが 身体を支え

だれかが 食事をとらせ

だれかが 垂れる涎を拭く

それでも  
背丈は伸びる

わたしは

少年の心の奥底に

あたたかな言葉のひかりを灯せるだろうか

言葉の薫りを届けられるだろうか

少年の

繊細な魂は

春の陽をいっぱいあびて

清潔な水のように

少年の赤いボールが

やわらかに

ゆっくり

転がってくる

## 徒然のエチュード 18

①

いやっほい ♪

傑作だ!!

詩を書きながら眠っていた

あの傑作は どこ?

②

(傘はここに置いてください。

ボールペンは使えませんが、

鉛筆なら使えます。

絵を傷つける

言葉はいいの?

③  
この煎餅は  
餃子味

じゃあ わたしは  
辛子味？

④  
娘が小さいころ言った

(大きくなったら  
疲れている母さんに  
マッサージ機を買ってあげるね

三十五年後  
マッサージ機が  
我が家にやってきた  
ホロリ……  
(:;)

⑤  
男のロマン  
女のフマン

⑥  
いい味の林檎  
いい味の詩  
どっちもうまい！

⑦  
愉快な話は  
かけ算  
不愉快な話は  
割り算

⑧

わたしが映っている

DVDをみた

垂れ目

肉づきのいい

わたしが くつきり

画像は

わたしの体形の変遷の記録

⑨

腹いっぱい！

体重なんて

もう知らなくい

## 【詩の勉強会】

去る五月十二日（日）、あきた文学資料館において、「第五回 ピッタの会」勉強会を開催した。

講師には若木由紀夫氏をお迎えした。演題は、「詩歌をめぐる問題、課題を一緒に考える」。

参加者は講師を入れて十四名。内、はじめての参加者は四名であった。

今回は、若木氏が詩作するとき流しているマイルス・デイヴィスのジャズ曲、「死刑台のエレベーター」で皆さんをお迎えした。

① はじめての参加者紹介

② 講師紹介

③ 講演

④ 質疑応答

## ●講演内容（レジュメより）

☆今、現代詩はどう見られているか

Ⅰ 現代詩の見え方

Ⅱ 現代詩の問題

1. 『現代詩』とはどういう詩形か

2. 口語

3. ポエジー

4. 『現代詩』を遠ざけているもの

Ⅲ 現代詩の？ エトセトラ

1. 詩人はどこにいるか？

2. なぜ、詩を書くのか・書いているのか？

3. どう、詩を書くのか

☆アンケートより

・今回は取り扱う範囲が広すぎて、ポイントがつかめにくかった。講師の無名有名を問わず、このような自主的「学習会」は大切なのでは

ないかと思えます。今後是非続けて下さい。

・詩は読み手が決める。詩人とは、状態を表す言葉である。不況に強い、現代詩。災害に強い現代詩。詩は被災したというが、組織化された。過去は言葉も同意された。加害者である。音楽は、脱皮する虹色の蛇である。夢幻のイメージ。イメージのさせ方の方向性が異なる。肉声のあじわい、肉声のあじ。朗読は、一つの解釈。作者自身による朗読は最高の朗読の一つ。

・詩について自由に縦横に語られて、詩について見識を深める事が出来た。音楽と詩の關係に、関心を持った。最後の演劇と文学の關係は、初めて知った内容でした。

・若木さんの詩は残念ながら知りません。読んだこともありません。問題設定の多くには、共感するところがありました。40年以上も詩作から遠ざかっているのですが、若木さんの現在の詩作行動の中での様々な迷いやこだわ

りは、いつまでも解決しないものだと思う。  
「時代の凡庸さに対する反感装置」を据える  
感性が基底だろうと思います。

・しっかりと良いお話をありがとうございました。  
語られれば語られる程、聞けば聞く程、  
分からなくなるのが「詩かな？」と、(私だ  
けかも) 思います。でも、詩の力を整理する  
ためにも色々な詩人の話はきいてみたい。

・詩を創ることを目的として参加しなかった私  
には、全てが新しく、この年になっても学習  
できるってうれしいと思いました。けれども、  
これから書くことに抵抗を感じそうです。何  
も考えずに、ただ言葉をつらねていたという  
ことに、再度気付かされました。

・今回の講演はレジメ!! 読みを深めるという  
点でピタリであったと思います。若木さん  
の目で見てきたものがまとめられていて、私  
の知らないものも多く参考になりました。範  
囲が広いので、一つ一つに時間を多くとられ

ないこともあります。今後一点を深く意見を  
交わすのも面白いかと思えます。  
・少しむずかしく、でも楽しかったです。



## 【あとがき】

新しく元号が変わり、「令和」にもなじんできた。昭和、平成、令和と移り、時代を生きている感が強い。

「和」には期待を込めていたが、「令」は予想外であった。出典は現存する最古の和歌集、万葉集からという。

くしくも過去に、王羲之の「蘭亭序」を臨書したことがあったので、詩句を思いだした。

万葉集には天皇や皇族といった身分の高い人たちだけではなく、下級武士や農民など、一般庶民の人々が詠んだ歌も数多く入っている。優れた歌の前では身分は一切問われなかった。当時の方言やなまりが入った歌もある。表記は万葉仮名。読み方はとても難しい。

現代詩も身分は問われず、方言もある。しかも漢字、ひらがな、カタカナ、記号……自由な表現。

しかし、近づけば近づくほど遠くなる詩の世界。たやすくはないからこそ愉しいともいえる。

\*

野球のイチローは現役を退くにあたり、へ前に進むための区切りと表現した。見事なイチロー語録である。

七十を目前にしたわたしの身体のなかの細胞は、刻一刻と老いているとしても、生涯現役をつづけたい。

コクトオも書いているが、わたしも詩の大木にことばを彫る。年齢とともに詩が成長するように。

